余命DEマンボ⑪

とらえもんとばんばん祭
2016.8.21

工業団地と近隣町会の合同の夏祭り「ばんばん祭」の季節が来た。この祭り、各町会が単独で行う祭りと比べて、同じ労力でも、３町会と工業団地合同なので、集客は数倍になる。工業団地は「感謝をこめてゲーム無料券」などをばら撒くから、タダで遊べると人気があり、１万人は来る勢いだ。「旦那文化の旦那達」による子供やご近所への気風の見せどころなのだ。

●工業団地と近隣住民の「共生」のために始めた「ばんばん祭(ざい)」。私が実行委員長を務め、今年で１０年を迎えた。10 年前の会議で、名前は一度「住工ふれあい祭り」と決まった。

●皆さんの意見を丁寧に取りまとめると、「平凡でおもしろくないもの」になることがよくある。

●この名前で第１回は開催した。しかし我々の「新郷工業団地」のそばに「新郷ふれあい祭り」という祭りがあるのを知り、これ幸いと、私の一存で「ばんばん祭」に名前を変えた。

●「小林さん、本当にそんなヘンな名前にするの？」

「聞いて吹きだしたでしょ、笑いを取れたら大丈夫」とか言って、今度は皆さんの意見を聞かずに強行した。

●そして祭りは市民権を得て「川口３大祭り」になった。来場者も年々増え、１０年で１万人の祭りに育てた。

●開会セレモニーで「万歳」をする写真。いちばん左の帽子が司会の私。真ん中の赤いＴシャツが石川理事長。センスと実行力のある川口のリーダーだ。

●開会セレモニーの司会は私がずっとやっている。

昨年、病気で組合の常任理事を降り、実行委員長でもなくなったが、頼まれて司会はやった。今年もやらせて頂いた。（経緯は４頁参）ばんばん祭の司会は、私の「ライフワーク」になった。

●前号に書いたが、晩年は先がないので「人生で一番幸せ」と、躊躇なく乱発できる。そして言えば言うほど幸せになっていく。この司会も、「人生で一番出来が良く、一番楽しかった」

●私は、笑わせながら軽妙に人をイジるのが得意。年齢も上になり、私がイジっても誰も文句を言わない。市長や県議をイジって笑わせるのはじつに楽しいのだ。

●例えば、「市長は前回の挨拶で、『ばんばん祭は川口３大祭り』なんて言っちゃいましたが、他の祭り関係者に漏れたら大変です。だけどそう言ってくれる市長が大好きデス」。みたいなことを言い、笑いを取る。

●こういうイジリを機関銃のように発射する。

●今回のキャラクターは、国民的人気の「ドラえもん」。私の好きな短歌に、桝野浩一の『ドラえもんがどこかにいる!』と子供らのさざめく車内に大山のぶ代」がある。こういうギャグっぽくて、そこにドラマが見えて、品のある歌を作りたいが、作れない。

●屋外ステージでは、写真のブラスバンドやイリュージョンが行われ、露店には子供が大好きなお祭りのゲームが並ぶ。

●消防署の「てんとうむし号」体験乗車も大人気。ベーコマ教室には、昔、わんぱく。今、ちょい悪のオヤジが揃っていた。

●川口は拉致被害者の街だ。東日本で風評被害のあった銚子も毎年出店。メンチやパン・クッキーは、社会福祉系からの出店だ。

●雲呑は中国人研修生が。産直は毎年手堅い人気。かき氷は三井生命出店で売上全額寄付。珈琲店ではコピ・ルアクが千円で飲める。

●マグロの解体ショーは祭りの目玉。鉄火丼にして 200 円で販売するが、整理券が要る。

●共催している近隣３町会の皆さまから、江戸袋町会の皆さま。

川口にある湊部屋の相撲取りが来て、餅つきをしてくれた。太っているのもいいね。

●共催している近隣３町会の皆さまから、東本郷南町会。後ろの黄色が山崎さん。

●震災支援で、南三陸町とは仲良し。祭りに参加してくれる。小野寺さん(左)達、ありがとう。

●共催している近隣３町会の皆さまから、東京都の都住舎人自治会の皆さま。

●この 10 年、「ばんばん祭」とのご縁は深く、広くなった。1 回目から思うと祭りの規模は倍になり、出展者も増えた。この祭りはみんなの作品で、私の作品でもある。人生でとても大事な作品だ。

●最近は、どこの誰だか知らない若者がたくさんいて、スタッフが 500 人はいそう。みんなボランティア。祭りとはこういうもの。祭りの参加に雇用は存在しない。

●店の「雛祭り一般公開」も、ボランティアの自主参加に切り替える時が来ている。ボランティアに進んで参加するという、自主的な気持ちが大事であり、公共心や社会性を育てる。

●そして、そのほうが祭りとして、強く、楽しく、本物だ。来年の「二木屋雛まつり」は、スタッフにも時間をもらい、ボランティアで参加するように軌道修正したい。お祭りは「人づくり」でもある。

●バルーンアートの「ＴOMO」と、フェイスアートの「ゆきちょん」（奥様）。３人での記念写真。●彼は公園で大道芸をしている時に声をかけ、催しに呼んだことからの付き合いでもう 10 年。その後、ゆきちょんと結婚し 10 キロ太り、バルーンアートの日本一になった。とてもいい青年だ。最後かもしれないので、顔に「どらえもん」を描いてもらい３人で撮った。右側の写真は、そのアップ。

●左／工藤慎太郎さんとのご縁も深くなってきた。この１２月２２日には、二木屋でディナーショーをやってもらう。彼の「紅白出演」と「武道館」を見てから死ねたら本望だ。私が少し長く生きて、彼が少し早くまたヒット曲を出せば可能だ。「DREAMS COME TRUE☆」。夢は叶う☆
●上／敬愛する富沢さん。司会を譲ってくれた人で、お祭りでいちばん忙しい人だ。ここは彼のおそば屋さん。昨日 350 食の蕎麦を打ったという。

「偶然と選択」⑥　自分で好きにできる「晩年の芸風」。

●今までずっと「ばんばん祭」の実行委員長として、開会式の司会をやってきた。
●病気になった一昨年もやり、病気で組合の理事を辞めた昨年も、「やっぱり小林さんに司会をやって欲しい」と言われてやった。
「元気なうちは私がやるもんだ」と思い込んでいた。
●しかし今年は声がかからなかった。病気だからと遠慮したのだろう。ばんばん祭の案内もなかった。なんだかとても寂しかった。
●私は事務局に電話して、「私はまだ元気だヨ。遠慮したんだろうけど病人は生きがいがあったほうがいい。そのほうが張り切れる。私に司会をやらせて」と伝えた。
●この熱きアプローチ、決して間違いではない。色で言えば「赤色」の選択だ。
●「そうだよね、小林さんがやりたいのなら、やってもらいましょう！」という答えがあると思いきや、断られた。
●「体が心配なので、小林さんにはご来賓として、ゆっくりご覧いただきたい」と言われたのだ。
●これは色で言えば「緑色のススメ」。私の体を心配してくれ、無理するなの配慮。これはこれでアリだ。
●それでも「赤色」で行きたいなら、司会をやる富沢さんに電話して、
「ばんばん祭は、私の大事な人生。死ぬまで、最終入院するまではやらせて！」と、言えば、もちろん喜んで譲ってくれただろう。
●しかし、私は「緑色のススメ」に従い、出しゃばらず、おとなしくすることにした。
●前号書いたが、「針治療のミスも文句を言わなかった。全ては好意でやった話。人生の終焉に怨恨を遺したくない。サラッと風のように生きたい」と書いたが、今を受け入れて、「サラッと風のように生きる」を選んだのだ。「相手に合わせてこちらも、ヒートダウンする」。こういう選択をしたのだ。
●「晩年の色をどう決めるか。それは我を張らずTPOで配慮するもんだ」と、教わった気がする。

晩年の初心。
晩年の勉強。
晩年の向上。
晩年の感謝。

●私は本来、熱いタイプだ。「小林さんは、積極的に元気で明るく逝ったね。凄いパワーだった」と言われたい。
●反面、「最期は風のよう飄々としていた。爽やかに、淡々と、楚々と、逝ったね」とも思われたい。
●どちらも素敵だ。そしてどちらの色を演じるか？　それを考えることも人生選択。これは最期じゃないとできないセルフプロデュースだ。勉強になった。こうまとめ筆をおいた。
●しかし今朝、事態は急転した。司会の富沢さんの電話で、
「小林さんがやってくれると聞いた。ぜひお願いしたい」と言われたのだ。気を遣ってくれている。ウルウルするほど嬉しかった。ばんばん祭は私の人生だから、死ぬまでやりたい。この急変は神の思し召しだ。ただ感謝。
●と言うことで、開会式の司会は私が立つ。酸素ボンベを付けず頑張って元気そうにして立つ。最終入院する日までは、ばんばん祭に立つ。やっぱり「赤」で行く！
●二木屋の社訓は、
「毎日が初心。毎日が勉強。毎日で向上。毎日に感謝。」というものだが、晩年もまた、「晩年の初心。晩年の勉強。晩年の向上。晩年の感謝。」がある。余命があるうちは、「日々学習と軌道修正」だ。
●まとめる。
ある時はエネルギッシュに精力的に振る舞い、ある時は淡々と枯れたように振る舞う。「攻め」と「受け」。その場の空気で「カメレオン」のように変幻自在に自分の色を変えるのが楽しい。
●古代中国の五行思想は、人生を春夏秋冬に例え、「青春」、「朱夏」、「白秋」、「玄冬」と、色で表している。晩年は玄、つまり黒だ。
●確かに病気の末期は、元気がなくなり、暗くなり、希望もなく、「グレーか黒」になりがちだ。
しかし「赤」や「緑」がいいのではないか。そのほうが、明るくて幸福ではないか。
人生一度の閉じるチャンス。元気出して逝きたい。